様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　5　月 1　日現在

機関番号：34416
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008　～　2010
課題番号：20520310
研究課題名（和文）
中世ドイツ叙事文学に見られる表現技法の解明
研究課題名（英文）
Elucidation of the expressive Technique in Middle High German epic verse
研究代表者　武市　修（TAKEICHI OSAMU）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：80140242

研究成果の概要（和文）：中世ドイツの叙事文学は語りの文学であるとはいえ、詩行のリズムを整え２行ずつ押韻することを絶対条件とする韻文の詩である。１行は基本的に強音と弱音の交替するリズミカルなタクトが４ないし６から成る。この制約の中で簡潔かつ的確に言葉を選んで自らの美的世界を描出することが詩人たちに求められた。そこではさまざまな語形・用語が用いられ、かくして中高ドイツ語文学独特の表現形式が生まれた。
本研究では、研究成果の欄で詳しく説明したように、それまでの研究結果を踏まえた上さらに調査の幅を広げ、言語の変遷という観点から４度の研究発表を行い、４本の論文を世に問うことによって新しい知見を斯界に示すことができた。

研究成果の概要（英文）：The epic poetry of Middle High German is a narrative literature. But it is a metrical poetry where it is absolutely asked to make rhythmical poems in rhyme. The poets make wide use of various word-forms and grammatical possibilities in order to describe their aesthetic world.
The results of this research were reported at the 12th. Congress of the International Association for Germanistics and at an International conference “On History and Typology of Language Systems” which both took place in Poland. Further more, I reported twice at Japanese conferences. And moreover, the results concerning this research were published in four papers

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	300,000	90,000	390,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：中高ドイツ語の迂言表現、中高ドイツ語の押韻技法、動詞 tuon の代動詞機能

１．研究開始当初の背景

中高ドイツ語の言語現象については 20 世紀初頭 K. Zwierzina などによって精力的に研究され、とくに縮約という音韻短縮については 20 世紀中葉の K. Geißner や Th. Frings の研究によってほぼ完結したかのように思われていた。しかし、押韻上の制約という観点からの解明は、先に J. Grimm がその過大評価を戒めたこともあり、それほど進まなかった。本研究はその観点から当時の言語現象解明を進めるべく申請された。

２．研究の目的

12 世紀末から 13 世紀前半まで宮廷を舞台に花開いた中高ドイツ語押韻文学の表現技法の特徴を明らかにする。とりわけ、hant, lîp, mære などの名詞の迂言表現、動詞 tuon の代動詞機能および動詞 sagen, legen, ligen, lâzen の縮約形の用法を押韻技法との関連から研究する。

３．研究の方法

先ず、この時代の二つの代表的な英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』と『クードルーン』における迂言表現を比較し、さらに、その他の宮廷叙事詩三大作品ハルトマン・フォン・アウエ昨『イーヴァイン』、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハの『パルツィヴァール』および格言詩『イタリアの客人』に見られる上に挙げた用語の全用例を改めて分析し、次に時代が少し下った散文作品である『ベーメンのアッカーマン』の用例と比較する。

４．研究成果

2008 年４月開催の阪神ドイツ文学会主催の研究発表において「中世ドイツの文学的・言語的展開」というタイトルでの中世ドイツの学問的・文化的状況を全体的に紹介した。７月のシンポジウムでは、中高ドイツ語作品を読む研究会の他の５名のメンバーと協力し、二大英雄叙事詩の言語的・文学的比較を行った。このような観点からのシンポジウムは日本で最初の試みだった。

2010 年７月 30 日～８月７日ポーランドのワルシャワで開催された５年に一度の国際ゲルマニスト会議第 12 回大会では、第 63 分科会で「古高ドイツ語から中高ドイツ語を経て新高ドイツ語への変遷　－　いくつかの言語現象　－」と題して発表した。本発表では先ず、動詞 legen, ligen, sagen の縮約形と本来の語形が如何に脚韻を踏みリズムを整えるのに使い分けられているかを、それまでの研究成果の上に本研究によって明らかにした結果をもとに示した。さらに代動詞 tuon の多様な用法を押韻技法の視点から示し、押韻文学たる中高ドイツ語の言語的特徴を明らかにした。さらに言語変遷という観点から、今日 tun よりも多く用いられる動詞 machen の用例を tuon の用例と比べた。中高ドイツ語ではその使用比率が 10 分の１にも満たない machen がすでにその当時多様な用法を示し、tuon に取って代わる可能性を早くからもっており、tuon の多用が押韻文学ゆえの現象であることを推論した。その論証のひとつとして次の時代である初期新高ドイツ語の散文作品である『ベーメンのアッカーマン』に見られる tuon と machen の使用頻度が 40 対 13 と、中高ドイツ語諸作品より machen が増加していることを示した。このような視点からの研究発表は私一人であり、他の参加者の注目を引いたものと思われ、多数の質問が出た。

2010 年 10 月７日から 10 日にかけてポーランドのジェロナ・グラ大学で行われた「言語体系の歴史と類型論」に関する国際シンポジウ

ムでは、対象を動詞 lâzen (nhd. lassen)に絞り、「動詞 lâzen (nhd. lassen)の中高ドイツ語から初期新高ドイツ語までの用法の変遷」と題して発表した。この報告では、先ず lâzen とその縮約形 lân が韻律上如何に使い分けられているかを、中高ドイツ語の代表的６作品に見られるすべての用例分析の結果によって示した。次に、lâzen の本動詞と助動詞としての使用頻度の違い、およびそれぞれの過去分詞の語形の違いを考察した。最後に、『ベーメンのアッカーマン』における調査結果と比べ、lâzen の用法上の変遷を明らかにした。

これら二度の発表成果は近い将来学会報告集の形で公刊されることになっており、原稿はすでに送付済みである。

４度の研究発表と並んで、研究期間内に４本の論文を内外に発表した。そのうち２本はドイツの言語学専門誌 Sprachwissenschaft に、動詞 lâzen の用法について、先ず、『ニーベルンゲンの歌』と『クードルーン』における用例分析が第一部として 2009 年に掲載され、第二部として、その他の宮廷叙事詩に見られる全用例を調査した結果を第一部の所見と合わせて総合的に示したものが翌年引き続いて同誌に受け入れられたものである。

他の２本は押韻技法から見た名詞の迂言表現に関する論考である。すなわち、2008 年に大阪大学ドイツ文学会の『独文学報』に名詞 lîp についての考察が、2010 年には関西大学独逸文学会の『独逸文学』に名詞 hant についての論考が掲載された。これらの研究は科研費による研究の目的に沿って調査した結果を示したものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４　件）

① Osamu Takeichi: Zum Gebrauch der kontrahierten Formen von *lâzen* in der mittelhochdeutschen Epik – unter besonderer Berücksichtigung der gebundenen Dichtung – II. Teil In: Sprachwissenschaft（査読有）, Bd. 35 (2010), S. 443-476.

② 武市　修： 押韻技法の観点から見た名詞 hant の用法、関西大学『独逸文学』（査読有）、第 54 号 （2010 年）、36～56 頁。

③ Osamu Takeichi: Zum Gebrauch der kontrahierten Formen von *lâzen* in der mittelhochdeutschen Epik – unter besonderer Berücksichtigung der gebundenen Dichtung –. In: Sprachwissenschaft（査読有）, Bd. 34 (2009), S. 187-205.

④ 武市　修:名詞の迂言用法 －押韻技法の観点から　lîp の場合－、大阪大学ドイツ文学会誌『独文学報』（査読有）、第 24 号（林正則教授退職記念号 2008 年）、17～39 頁。

〔学会発表〕（計４　件）

① Osamu Takeichi: Der Wandel der Gebrauchsweisen vom Verb *lâzen* (nhd. lassen) vom Mittelhochdeutschen zum Frühneuhochdeutschen. Internationale Fachtagung, orientiert vom Institut für Germanistik der Universität Zielona Gora, 2010 年 10 月８日、ジェロナグラ大学（ポーランド）。

② Osamu Takeichi: Wandel vom Ahd. über das Mhd. ins Frühnhd. – einige sprachliche Phänomene –. 国際ゲルマニスト会議第 12 回大会　2010 年８月３日、ワルシャワ大学（ポーランド）。

③ 武市　修:『クードルーン』におけるいわゆる「ニーベルンゲン詩節」について（シンポジウム『クードルーン』を読む－　『ニーベルンゲンの歌』との語学的・

文学的比較から　ーにて)。阪神ドイツ文学会第 197 回研究発表会、2008 年７月６日、大阪産業大学。

④　武市　修：中世ドイツの文学的・言語的展開。阪神ドイツ文学会第 196 回研究発表会、2008 年４月６日、神戸大学。

６．研究組織

(1)研究代表者

武市　修（TAKEICHI OSAMU　　）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：80140242

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：